量壽經一百部、四十部爲毘沙門天王、卅部爲帝釋天王、卅部爲梵釋天王、卅部爲梵釋天王、造摩訶衍一部百卷、卅卷爲毘沙門天王、卅卷爲帝釋天王、卅卷爲梵釋天王、內律五十五卷、一分爲毘沙門天王、一分爲帝釋天王、一部爲梵釋天王、造賢愚一部、爲毘沙門天王、觀佛三昧一部、爲帝釋天王、大雲一部、爲梵釋天王、願天王等早成佛道、有願元祚無窮、帝嗣不絕、四方附化、惡賊退散、國豐民安、善願從心、含生有識之類、減(咸)同斯願、(以下缺)

これによると大魏の普泰二年壬子（532 A. D.）の歳には東陽王元榮といふ人が瓜州刺史であつたもので、此の奥書の願文も其の任地なる瓜州卽ち敦煌（當時瓜州といふのは敦煌の地で、東方常樂縣に瓜州が置かれることになつたのは、唐の武德五年以後の事である）で書かれたものに相違ない。普泰といふのはこゝにいふ壬子の前年辛亥の歳二月に卽位した節閔帝の年號で、同帝は其の十月に廢せられ、同月代りて卽位した後廢帝（魏書に據る）は中興と改元し、翌年四月には帝もまた廢せられて年號も太昌と改められた。それで普泰は元年だけで壬子の歳三月といふのは正しくは中興二年三月と稱せらるべき筈である。邊地敦煌の事であるから、頻々たる改元の事情に通じないで、中興と改まつて後既に五ヶ月目に當つてもなほ普泰の年號を用ゐたのか、或は故意にかく稱したのか判定し難い。

さて魏書の孝莊紀に據ると、永安二年（529 A. D.）八月「丁卯封瓜州刺史元太榮　爲東陽王」と見ゐ、北史魏本紀第五にも同樣の事が見ゐて居るが、たゞ北史には元太榮を元太宋に作つてある。この永安二年に東陽王に封ぜられた瓜州刺史元太榮（宋）が、前揭律藏初分卷第十四の奥書に普泰二年（532 A. D.）の日附を以て現はれる瓜州刺史東陽王元榮に外ならぬことはいふまでもない。魏書に元太榮、北史に元太宋と記して居るに鑑みると、奥書